

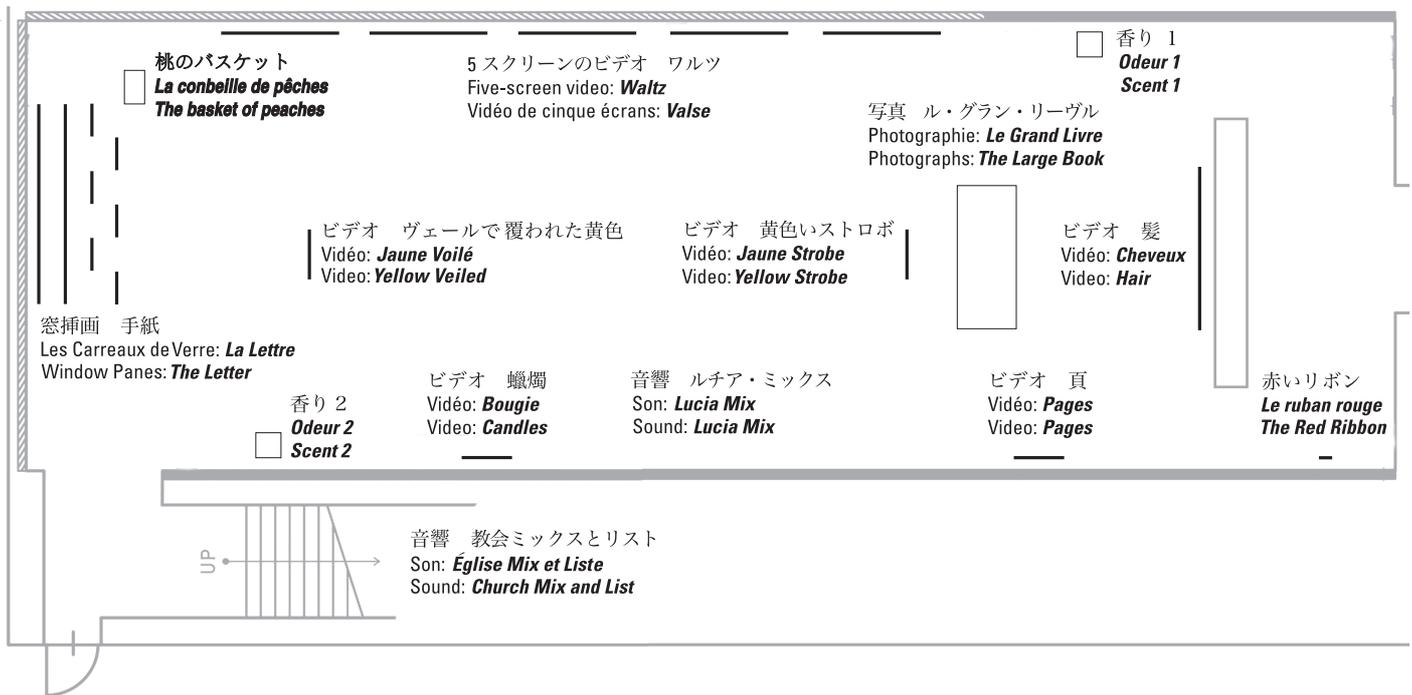
都合により、作品の配置が変更となりました。下記マップをご参照ください。
The order of display has been changed as follows.

《香り 1, 2, 3》は、ガラスドームを開けて、香りをお楽しみいただけます。

《写真 ル・グラン・リーブル》および《灰色の本》は、一度に1ページずつ、慎重にページをめくってください。

Scent 1, 2, 3 Please lift the glass cloche up to your nose and inhale the scent.

The Large Book and **The Gray Book**, Please feel free to carefully turn the pages one page at a time.



@KCUA 1

上から順に
Du haut en bas
From the top

スケッチ 風景
Esquisse: **Paysage**
Sketch: **Landscape**

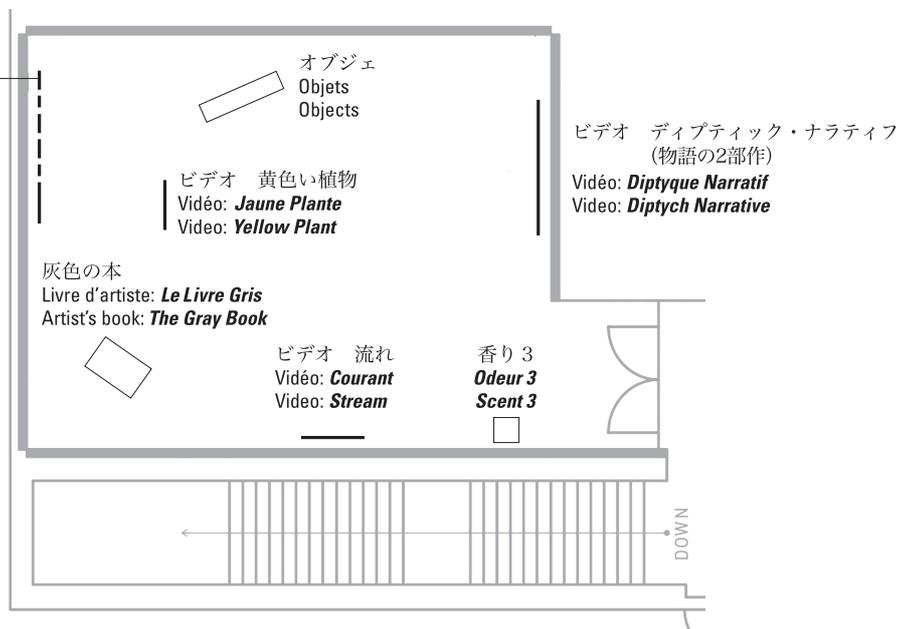
ビデオ 虫
Vidéo: **Araignées deau**
Video: **Bugs**

スケッチ 牛乳に浸した青花のように
Esquisse: **Comme des Fleurs Bleues dans du Lait**
Sketch: **Like Blue Flowers in Milk**

アルベール・フォーリエによる2つのスケッチの複製
Reproductions de deux esquisses d'Albert Fourié
Reproductions of two sketches by Albert Fourié

ビデオ 虫
Vidéo: **Araignées deau**
Video: **Bugs**

19世紀パリの地図
Plan de Paris de XIXème siècle
19th century Map of Paris



@KCUA 2

ボヴァリー夫人 あらすじ

第一部

ある日、ルーアンの年少学校に内気そうな田舎の少年が転入してくる。シャルル・ボヴァリーという名の彼は、退職した軍医補の息子であった。まじめな勉強ぶりで中程度の成績を保って落第せず、そのうち親の希望で医学校に進み、トストの開業医となった。仕事に就いたシャルルは両親の勧めのまま、持参金のたっぷりある年上の45歳の未亡人エロイズと結婚する。しかし結婚後、やきもち焼きのこの女性は自分の資産について嘘をついていたことが判明、舅と姑に糾弾され、まもなく心労がもとで咯血し急逝してしまう。独身者となったシャルルはしばらく気落ちしていたものの、以前に骨折を往診治療した農夫ルオーの親切に触れて親しく通うようになり、その一人娘エマに惹かれて彼女に求婚する。承諾が得られると客を大勢招いた田舎風の結婚式を執り行っ、それから新たな結婚生活が始まった。エマは修道院出の夢見がちな女性で、小説や物語を読みロマンティックな空想に浸るのが好きだった。実家の田舎暮らしに飽き飽きして結婚したエマだったが、やがてこの結婚生活にも、自分が考えていたような恋の情熱も湧き立つような幸福も見出せないことに幻滅し始める。その思いは、ある日夫妻で侯爵家の舞踏会に招かれたことでいっそう強くなっていく。侯爵たちの豪華な生活と比べ、自分の平凡な家庭、とりえのない凡庸な夫が心底嫌になり、都会の社交生活に加われない自分を不幸な人間だと考えるようになる。

第二部

妻の神経症的な変調を場所のせいだと考えたシャルルは、決心してトストを捨てヨンヴィル・ラペーという村に移り住むことに決める。ラペーでは俗物的な薬剤師オマー、その家の下宿人で公証人書記の青年レオンといった人物と交流し、田舎の新しい生活、出産といった出来事でエマの気はやや紛れる。エマはレオンに惹かれていき、レオンもまた彼女に憧れるが、どちらからも言い出せないまま進展せず、レオンは法律の勉強のため都会生活のほうに惹かれてパリへ向かってしまう。エマは幻滅し再び耐え難い退屈を感じ始める。そんな中、資産家の田舎紳士ロドルフが下男（雇い人）に瀉血を施してやるためにシャルルを訪ねてくる。エマに目をつけた遊び人のロドルフは、村で開かれた農業公進会の際に周りの目を盗んでエマに迫る。エマはロドルフの世慣れた態度に引かれ、誘われた乗馬についていった際に、森の中で体を許してしまう。それから夫の目を盗んでの逢引きが始まる。エマは毎日のように熱心に恋文を送り、恋愛を味わう幸福に浸る。一方、夫のシャルルはオマーにそそのかされて足の外科手術に手を出して失敗し、患者である宿屋の下男足の足を切断させることになってしまう。夫の才能の無さにいっそうの幻滅を感じるエマだったが、このとき義足を用立てた商人ルウルーに次第に気を許し、彼の勧めのままにぜいたく品をつけて買うのが習性になる。エマは人目を盗んでの逢引きに飽き足らず、ロドルフに駆け落ちをするように迫る。しかし自分の生活を捨てる気のないロドルフは駆け落ちの約束を破り、エマに別れの手紙を書いて馬車で姿を消す。ショックを受けたエマはヒステリックになり、やがて反動で信心深くなって信仰に救いを求めるようになっていく。そうした中、エマは夫に誘われて気晴らしのためにルーアンへ観劇に出かけ、住まいをルーアンに移していたレオンと3年ぶりに偶然再会する。

第三部

再会したレオンと互いに情熱を復活させたエマは、ピアノの稽古という口実を設けて毎週彼に会うが、つけて買ったぜいたく品のために高利貸しのルウルーへの借金が膨らんでいく。エマは夫のシャルルに知られないように地所を売るなど手を打つも品物を買う癖が抜けず、ついに裁判所から差し押さえの通知が来たため、返済のために奔走する。レオンやかつての恋人のロドルフから金を得られず、絶望の末に薬剤師の家に忍び込んで砒素を飲んでしまったエマは、応急処置もむなしく衰弱していく。やがて死の床で司祭から聖油を受けると、宗教的な荘重さによって慰謝されたかに見えたエマのもとには、最後の瞬間にまるで彼女の人生をあざけるように乞食の歌う卑猥な歌が聞こえてくる。エマは狂ったように笑い、息絶える。こうして、シャルルは家具類をあらかた差し押さえられてなお多額の借金を抱え、それでもエマの不貞に気付いておらず理解できないまま、思い描いていた幸福な人生が突如として不幸に断ち切られたことに呆然となる。その後、エマを神聖視して自身も彼女のような生活態度を取ろうとした結果、娘のベルタに満足な服を買ってやることもできないほど借金で貧しくなったシャルルは、ついにエマの机から不貞の証拠となる手紙を見つけてしまう。一方、薬剤師のオマーは商売が成功し、新聞に気の利いた記事を書いて送り、子供も順調に育って幸福な生活を送っていた。自分にレジオン・ド・ヌール勲章が贈られないことをただ一つの不満としていたオマーは、庭に勲章の星印をかたどった芝生を作らせて受章の知らせを毎日待ち、最後には念願の勲章を貰い受ける。シャルルが庭先でエマの遺髪を握りしめたまま急死し、ベルタが遠い親戚に引き取られて工場へ働きに出されたところで、物語の幕は下りる。